國學院大學学術情報リポジトリ

動詞連用形に後接する「おはす・おはします」

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-06 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 呉, 寧真 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00000931

動詞連用形に後接する「おはす・おはします」

呉　寧真

キーワード：複合動詞、敬語、通常語形、補助動詞、源氏物語

1．はじめに

中古和文の「おはす」と「おはします」は、移動・存在の意味を表す主体敬語である。例えば小学館『古語大辞典』では、次のように３つの用法に分類されている（「おはす」･「おはします」の項目）。

A①「あり」「ゐる」の尊敬語。

②「行く」「来」の尊敬語。

B補助動詞。

この場合、問題となるのは、動詞連用形に後接する場合で、「―来」「―行く」（注１）などの複合動詞の後項の敬語形なのか、主体に敬意を添える補助動詞なのか、また、複合動詞の後項の場合、①の意味なのか、②の意味なのかは判別しにくい。例えば、源氏物語には、以下のような例が見える。

(1) よそにて隔たる月日は、おぼつかなさもことわりに、さりともなど慰めたまふを、（匂宮ガ）近きほどにののしり**おはし**て、つれなく過ぎたまふなむ、つらくも口惜しくも思ひ乱れたまふ。　〈総角5-295〉

(2) 秋の夕のただならぬに、宰相中将も寄り**おはし**て、例ならず乱れてものなどのたまふを、人々めづらしがりて、　〈真木柱3-398〉

(1) は「つれなく過ぎたまふ」とあるので、騒ぎながら移動している場面であることが分かる。「ののしりおはす」は「ののしり来」の敬語形と解釈でき、複合動詞の後項であると考えられる。それに対して、(2) の「寄る」には移動の意味があるため､「おはす」が複合動詞の後項である可能性もあり、

補助動詞である可能性もあり、判然としない。しかし、これまで動詞連用形に後接する「おはす・おはします」が複合動詞の後項なのか、補助動詞なのかを考察した研究は見られないようである。(注２)

そこで本稿では、動詞連用形に後接する「おはす・おはします」は複合動詞の後項なのか、補助動詞なのか、また、どの語の敬語であるのかについて明らかにすることを目的とする。

２、調査方法

本稿は「おはす・おはします」に前接する動詞を調査し、その動詞が「来」「行く」「あり」「ゐる」と複合するかどうかを確認することで、「―おはす・おはします」の意味用法を探っていく。

本稿の調査資料は源氏物語とした。調査には「日本語歴史コーパス」(国立国語研究所（2016)）を利用し、異同の確認は『源氏物語大成　校異編』を参照した。表記は一部改めた。引用文中の〔　〕は話し手と聞き手を、(　)は補足説明を、〈　〉は出典の巻名、小学館『新編日本古典文学全集』の巻数-頁数を示す。

３、「―おはす・おはします」とその通常語形

本稿では、「―おはす・おはします」の通常語形を探るために、「おはす・おはします」に前接する動詞と、その動詞が複合する形式を調査する。その結果をまとめたのが次の表である。表の縦列は前項であり、横列は後項である。

	後項 前項	―おはします ―おはす	―来	―行く	―あり	―ゐる
グループⅠ	渡る	8	3			
	巡る	1	3			
	歩む	2	2			
	走る	2	2			
	通ふ	1	1			
	流る	1	1			
	見ゆ	1	1			
	過ぐ	1		11		
	移ろふ	1		1		
	帰る	3	6	1		
	分く	1	3	2		
	移る	1	1	1		
グループⅡ	籠る	14				26
	起く	3				14
	眺む	2				10
	聞く	5				12
	見る	1				11
	添ふ	4				7
	泣く	1				1
	独り言つ	3				1
	待つ	2				1
グループⅢ	出づ	5	139			8
	寄る	6	13			26
	入る	5	12			8
	立つ	1	3			4
	登る	1		1		1
グループⅣ	ののしる	1				
	語らふ	1				
	過（よ）きる	1				
	並ぶ	2				
	紛らわす	2				
	大人ぶ	1				
	慎む	1				
	動く	1				
	即く	1				
	憐ぶ	1				
	棄つ	1				
	足る	1				
	佇む	1				
	遊ぶ	1				

全用例を見渡すと、「―来」「―行く」「―ゐる」の例が見られた。しかし、「―あり」は「あり」が重複して副詞的に用いられた「ありありて」の形以外、動詞連用形に後接した例はない。次項から「―来」「―行く」「―ゐる」の順で見ていく。

３・１、移動の意味がある複合動詞

表のグループⅠの動詞は、移動動詞「来」「行く」だけに前接する動詞である。（注３）

まず、「来」だけに前接するのは「渡る」「巡る」「歩む」「走る」「通ふ」「流る」「見ゆ」の7語である。その７語に後接する「おはす・おはします」を検討すると「―来」の敬語形だと考えて問題ないようである。

(3)（朱雀院ガ）かねてさる御消息もなくて、にはかにかく渡り**おはしまい**たれば、主の院（＝源氏）驚きかしこまりきこえたまふ。

〈柏木4-303〉

(4)〔阿闍梨〕「（八ノ宮ハ）いかなる所におはしますらむ。さりとも涼しき方にぞと思ひやりたてまつるを、先つころ夢になむ見え**おはしまし**し。……」〈総角5-320〉

(3) は朱雀院が下山し、源氏を訪れる場面である。(4) は故八の宮が阿闍梨の夢に現れる場面であり、「見ゆ」には移動の意味がないが、動作主である故八の宮は阿闍梨のもとに移動して来たといえる。いずれの例も、動作主が移動して視点人物のもとに現れる点で、「―おはす・おはします」は「―来」の敬語形だと考えられる。

次に、「行く」だけに前接するのは「過ぐ」「移ろふ」の２語である。

(5)〔僧都→冷泉帝〕「……。これは来し方行く先の大事とはべることを、過ぎ**おはしまし**にし院（＝桐壺院）、后の宮（＝藤壺ノ宮）、ただ今世をまつりごちたまふ大臣（＝源氏）の御ため、……」〈薄雲2-451〉

(6)〔入道→源氏〕「いととり申しがたきことなれど、わが君、かうおぼえなき世界に、仮にても移ろひ**おはしまし**たるは、もし、年ごろ老法師の祈り申しはべる神仏の憐びおはしまして、……」〈明石2-244〉

(5) は話している時点で、桐壺院と藤壺の宮はすでにこの世を去っている。「過ぎ行く」の敬語形だと考えられる。(6) は源氏が話し手である入道がいる場所に移る例である。通常語形は「移ろひ行く」の例しか見られないが、「移ろひ来」の敬語形だと考えられる。

また、「来」にも「行く」にも前接する動詞は「帰る」「分く」「移る」の3語である。

(7)〔少将ノ尼→僧都〕「あなあさましや。などかく奥なきわざはせさせたまふ。上（＝浮舟）、帰り**おはしまし**ては、いかなることをのたまはせむ」と言へど、〈手習6-339〉

(8) まことにさにやあらむ、（大将ハ宇治へ）時々かかる山路分け**おはせ**し時、いとしるかりし随身の声も、うちつけにまじりて聞こゆ。〈夢浮橋6-383〉

(9) 巳の刻に行幸ありて、まづ馬場殿に、左右の寮の御馬牽き並べて、左右の近衛立ち添ひたる作法、五月の節にあやめわかれず通ひたり。未下るほどに、（帝ト院ハ）南の寝殿に移り**おはします**。〈藤裏葉3-459〉

(7) は浮舟が話し手の少将の尼から去るため、通常語形は「帰り行く」だと考えられる。(8) は薫が山道を分けて宇治に向かい、通常語形は「分け行く」だと考えられる。(9) は源氏が南の寝殿にいて、帝と院が移動してくる場面であり、通常語形は「移り来」だと考えられる。

以上のように、グループⅠの「―おはす・おはします」は「―来」「―行く」の敬語形だと考えられる。その共通点は、動作主が移動している点に求められる。

３・２、移動の意味がない複合動詞

表のグループⅡの動詞は「ゐる」だけに前接する動詞で、「籠る」「起く」「眺む」「聞く」「見る」「添ふ」「泣く」「独り言つ」「待つ」の9語がある。(注４) まず、通常語形の例をあげる。

(10)（入道ハ）昼は日一日寝をのみ寝暮らし、夜はすくよかに起きゐて、

「数珠の行く方も知らずなりにけり」とて、手をおしすりて仰ぎゐたり。〈明石 2-271〉

(11)「……」と、(妹尼ハ) 泣く泣く、たゆむをりなく添ひゐてあつかひきこえたまふ。〈手習6-297〉

(10) は入道が娘のことを心配して、夜に起きて祈る場面であり、「―ゐる」は「じっとしている」の意味に解釈できる。(11) は妹尼が投身した浮舟を世話している場面であり、「添ひゐる」は「そばについて、どこにも移動しない」の意味である。「ゐる」はもともと「座る」の意味を表すが、複合動詞の後項の場合は「じっとしている」「動かないでいる」のように、動作主の動きがないことを表す。これを踏まえて、グループⅡの9語を検討すると、「―ゐる」の敬語形だと考えて問題ないようである。

(12) からうして、その暁に、男にて生まれたまへるを、宮もいとかひありてうれしく思したり。……。かく籠り**おはしませ**ば、参りたまはぬ人なし。〈宿木5-472〉

(13)〔朝顔ノ姫君〕「……」とばかりあるを、(源氏ハ) 例の御目とどめたまひて見**おはす**。〈少女3-18〉

(12) は中の君の出産のため、春宮が二条院に籠っている場面であり、動作主の春宮は動いていない。(13) は朝顔の姫君の手紙を、源氏が目をとどめている場面であり、源氏は見るだけで動いていない。以上のように、グループⅡの動詞はすべて動作主が動作をした後に、じっとしているか、動かないでいる場面であり、「―おはす・おはします」は複合動詞「―ゐる」の敬語形だと考えられる。

３・３、「来」「行く」にも「ゐる」にも前接する動詞

グループⅢの動詞は「来」「行く」にも「ゐる」にも前接する動詞で、「出づ」「寄る」「入る」「立つ」「登る」の5語がある。まずは「入る」の通常語形から「―来」「―行く」と「―ゐる」の違いを確認する。

(14) 近くさぶらふ女房二人ばかりあれど、すずろなる男のうち入り来たるならばこそは、こはいかなることぞとも参り寄らめ、

〈宿木5-429〉

（15）峰高く、深き岩の中にぞ、聖入りゐたりける。　〈若紫1-200〉

（14）はいいかげんな男が入ってきたと述べている場面であり、動作主である男は移動している。（15）は岩に囲まれたところに聖が籠っていると述べている場面であり、動作主である聖は動いていない。「―来」「―行く」と「―ゐる」との違いは動作主が移動しているか、動かないでいるかで分けられる。これを踏まえて敬語形を見る。

（16）東の廂の下りたる方にやつれておはするに、（薫ハ）近う立ち寄りたまひて、……。闇にまどひたまへる御あたりに、いとまばゆくにほひ満ちて入り**おはし**たれば、　〈椎本5-196〉

（16）は薫が東の廂に移動した場面であり、通常語形は「―来」だと考えられる。「入りおはす・おはします」の５例はすべて移動する例であり、「―来」「―行く」の敬語形と認められる。

「入る」と同じように、「出づ」は「来」に前接すれば「出てくる」「現れる」の意味であり、「ゐる」に前接すれば「外にいる」の意味である。「登る」は「行く」に前接すれば「登って行く」の意味であり、「ゐる」に前接すれば「登って、そこにいる」の意味である。「寄る」は「来」に前接すれば「寄ってくる」の意味であり、「ゐる」に前接すれば「身を寄せている」の意味であると考えられる。これを踏まえて「出づ」「登る」「寄る」の例を検討すると、いずれも「―来」「―行く」の敬語形だと考えられる。

（17）（匂宮ハ）出でたまはむ心地もなく、……、何ごとも生ける限りのためこそあれ、ただ今出で**おはしまさ**むはまことに死ぬべく思さるれば、　〈浮舟6-126〉

（18）〔僧〕「……。右大臣殿の四位少将、昨夜夜更けてなむ登り**おはしまし**て、后の宮の御文などはべりければ下りさせたまふなり」など、　〈手習6-333〉

（19）この女御の御方に参りて、物の音など調べ、なつかしきほどの拍子うち加へて遊ぶ、秋の夕のただならぬに、宰相中将（＝夕霧）も寄り**おはし**て、　〈真木柱3-398〉

（17）は匂宮が浮舟のいるところから出ていくのが死ぬほどつらいと述べている場面であり、「―おはします」は「―行く」の敬語形だと考えられる。（18）は夕霧の息子の少将が山を登ってここに来たことを、僧が述べている場面であり、「―おはします」は「―来」の敬語形だと考えられる。（19）は音楽があるところに夕霧が寄ってきた場面であり、「―おはす」は「―来」の敬語形だと考えられる。

以上の動詞は、「来」「行く」にも「ゐる」にも前接するが、すべて「―来」「―行く」の複合動詞だと考えられる。その場合「―ゐる」の敬語形がないことになり、「―ゐる」を敬語形にするにはどうすればよいのかという疑問が生じるが、源氏物語には「―来」「―行く」は「たまふ」が後接することなく（注5）、敬語形は「―おはす・おはします」しかないのに対し、「―ゐる」は「たまふ」が後接できるという用法上の違いがある。

（20）出で入りたまひし方、寄りゐ**たまひ**し真木柱などを見たまふにも胸のみふたがりて、ものをとかう思ひめぐらし、　〈須磨2-190〉

（20）は「寄りかかって動かないでいる」の意味である。このように、「―ゐる」の敬語形は「―ゐたまふ」が担っているものと思われる。

以上のように、グループⅢの動詞に後接した「おはす・おはします」は「―来」「―行く」の敬語形だと考えられる。

ただし、グループⅢのなかで、「立つ」だけは問題がある。

（21）〔惟光→源氏〕「鍵を置きまどはしはべりて、いと不便なるわざなりや。もののあやめ見たまへ分くべき人もはべらぬわたりなれど、らうがはしき大路に立ち**おはしまし**て」とかしこまり申す。

〈夕顔1-137〉

（21）は惟光が鍵を忘れたせいで、源氏が道に立っている（もしくは、源氏をのせる車が道に止まっている）場面である。

通常語形を調べると、「立ち来」が３例、「立ちゐる」が4例あるが、ともに「立っている」という意味ではない。

（22）（源氏ハ）独り目をさまして、枕をそばだてて四方の嵐を聞きたまふに、波ただここもとに立ちくる心地して、　〈須磨2-199〉

(23)（入道ハ）忍びてよろしき日みて、母君のとかく思ひわづらふを聞きいれず、弟子どもなどにだに知らせず、心ひとつに立ちゐ、輝くばかりしつらひて、〈明石2-255〉

(22) は「波が打ち寄せてくる」の意味であり、波が移動している意味を表す。(23) は動作の存続ではなく、「立ったり座ったりする」という意味である。この場面は「しつらひて」とあるので、入道が娘の部屋を整える場面であることが分かる。「立っている」と解釈すると文脈に合わない。この「立ちゐる」は (21) の「立ちおはします」の通常語形ではないことが分かる。

したがって、「立ちおはします」は「立ち来」「立ち居る」の敬語形ではない。この語は次節に取り上げる通常語形がない例だと考えられ、次節で改めて考察する。

４、通常語形のない「―おはす・おはします」

グループⅣは通常語形がない動詞である。そのうち「ののしる」「語らふ」「よきる」「並ぶ」に後接する「おはす・おはします」は複合動詞の後項だと考えられる。

(24) よそにて隔たる月日は、おぼつかなさもことわりに、さりともなど慰めたまふを、（匂宮ガ）近きほどにののしり**おはし**て、つれなく過ぎたまふなむ、つらくも口惜しくも思ひ乱れたまふ。

(1) の再掲〈総角5-295〉

(25)（鬚黒大将ハ）小君達をば車に乗せて、語らひ**おはす**。六条殿にはえ率ておはせねば、殿にとどめて、「なほここにあれ。……」とのたまふ。〈真木柱3-379〉

(26)〔僧→惟光〕「（源氏ガ）過きり**おはしまし**けるよし、ただ今なむ人申すに、驚きながらさぶらふべきを、なにがしこの寺に籠りはべりとはしろしめしながら忍びさせたまへるを、愁はしく思ひたまへてなん。……」〈若紫1-210〉

(27) 大殿油などまゐりて、（源氏ト紫ノ上ト）うちとけ並び**おはします**御ありさまども、いと見るかひ多かり。〈玉鬘3-119〉

（24）は第1節で見たように、動作主の移動があり、「―来」の敬語形だと考えられる（注６）。（25）は鬚黒大将が式部卿宮のところから離れ、男君たちと話しながら自宅に戻る場面で、動作主の移動があり、「―行く」の敬語形だと考えられる（注７）。（26）は源氏が僧の坊を通り過ぎて聖の元へ移動したと僧が述べている場面であり、動作主の移動があり、「―行く」の敬語形だと考えられる。（27）は動作主の移動がなく、二人が並んでくつろいでいる場面であり、「―ゐる」の敬語形だと考えられる（注８）。

この４語のほかの例には、動作主の移動の意味が認められない。また、動作主が動かないでいることを表すのでもない。

（28）大臣（＝源氏）ぞ、なほ常なきものに世を思して、いますこし（帝ガ）おとなび**おはします**と見たてまつりて、なほ世を背きなむと深く思ほすべかめる。〈絵合2-392〉

（29）〔阿闍梨→薫〕「……。この寝殿を（アナタガ）御覧ずるにつけて、御心動き**おはします**らむ、ひとつにはたいだいしきことなり。……」〈宿木5-456〉

（30）例の、涙ぐみたまへれば、（匂宮ハ）いとものしと思して、「……」とて、伏目になりて、御衣の袖を引きまさぐりなどしつつ、紛らはし**おはす**。〈幻4-530〉

（28）は源氏が、帝がもう少し大人になったら出家しようと考えている場面であり、動作主の移動もなく、「大人になって、じっとしている」とも解釈できない。（29）は動作主の移動もなく、「心が動いて、じっとしている」や「心が動いて、動かないでいる」とも解釈できない。（30）は源氏が縁起悪いことを言ったため、匂宮が源氏の袖を引っ張って、不安などを紛らわそうとしている場面であり、動作主の移動もなく、「ごまかして、じっとしている」とも解釈できない。いずれも「～している」という動作の存続を表していると考えられる。同様に「紛らはしおはす」〈朝顔2-480〉、「つつしみおはします」〈賢木2-105〉、「即きおはします」〈薄雲2-451〉、「足りおはします」〈薄雲2-452〉、「佇みおはす」〈常夏3-242〉、「憐びおはします」〈明石2-244〉、「棄ておはします」〈若菜上4-109〉、「遊びおはす」〈東屋6-44〉、「立ちおはします」

〈夕顔1-137（21）〉も「～している」の意味で解釈できる。したがって、「―来」「―行く」や「―ゐる」の複合動詞の後項とは考えられず、動作の存続を表す補助動詞ではないかと考えられる。

その場合の通常語形として、以下の三つの可能性が考える。

① 「―あり」の敬語形である。

② 存続の助動詞「り」の敬語形である。

③ 「―ゐたり」の敬語形である。

まず、可能性①を検討する。存続の意味は「あり」に相当するが、３節で見たように、「あり」は複合動詞の後項に現れない。したがって、「―あり」の敬語形とは考えにくい。次に、可能性②を検討する。存続の助動詞「たり」が「ておはす」で敬語形を作るように、「おはす」を「り」の敬語形だと考えることもできそうである。しかし、上二段動詞「おとなぶ」、下二段動詞「棄つ」のように「り」が接続できない四段活用以外の例もある。可能性②はすべての例を説明しきれない。最後に、可能性③を検討する。

金水（1982、2006）は、「ゐる」は単独では存続の意味を表せず、「～たり」「～たまへり」等を付加しなければならないこと、また、源氏物語の「―ゐる」を、「たり」が接続するかしないかによって２つに分け、接続しない例が多い動詞は「運動・動作」を表す動詞であり、接続する例が多い動詞は「精神活動・言語行動」を表す動詞であることを指摘している。グループⅣの動詞を見ると、ほとんど「精神活動・言語行動」に属することから、「―おはす・おはします」は「―ゐたり」の敬語形ではないかと考えられる。

ただし、「立ちおはします」だけは、「精神活動・言語行動」とは言えないので、可能性②の「立てり」の敬語形ではないだろうか。「立つ」の対義語が「居る」であるため、複合動詞の後項や補助動詞の「―ゐる」が接続しにくかったのかもしれない。なお、「立つ」は、「立てり」の９例に対し、「立ちたり」は１例しかなく、「たり」よりも「り」と結びつきやすい動詞である。

以上のように、グループⅣの「―おはす・おはします」は、「―来」「―行く」の敬語形と見るべきもの、「―ゐる」の敬語形と見るべきもののほかに、補助動詞「―ゐたり」「―り」の敬語形だと考えられる例が見られた。用例

数としては多くないが、源氏物語には動詞の連用形に後接する補助動詞の例も認められるのである。

５、おわりに

本稿では、動詞に後接する「おはす・おはします」が複合動詞の後項か、補助動詞か、また、どの語の敬語形なのかについて、通常語形を調査することを通して探り、以下の結論を得た。

１、 通常語形に「―来」「―行く」の例しかないグループⅠの「―おはす・おはします」は、「―来」「―行く」の敬語形である。

２、 通常語形に「―ゐる」の例しかないグループⅡの「―おはす・おはします」は、「―ゐる」の敬語形である。

３、 通常語形に「―来」「―行く」「―ゐる」の例のあるグループⅢの「―おはす・おはします」は、「―来」「―行く」の敬語形である。その場合「―ゐる」の敬語形は「―ゐたまふ」で表した。

４、 通常語形がないグループⅣの「―おはす・おはします」は、動作主の移動があれば、「―来」「―行く」の敬語形であり、動作主が動かないでいる場合は、「―ゐる」の敬語形であり、動作の存続を表す場合は「ゐたり」「り」の敬語形だと考えられる。

要するに、「―おはす・おはします」は複合動詞の後項ととらえるのが原則で、動作主の移動がある場合は「―来」「―行く」の敬語形であり、動作主が動かないでいる場合は、「―ゐる」の敬語形である。また、動作の存続を表す場合に限って、補助動詞だと認められるが、源氏物語にはわずかな例しか見られない。

注

(1) ある動詞が後項になる場合は「―動詞」で示す。

(2) 日浅（1957）は「来」「行く」の意味の複合動詞を取り上げているが、「―おはす・おはします」の通常語形は何かという視点では考察していない。中村（1995）は補助動詞の「おはす・おはします」を取り上げる中で、複合動詞の後項である可能性を示し

ている。

(3) グループⅠは源氏物語だけではなく、「日本語歴史コーパス」（調査範囲：平安、鎌倉、室町）で検索した結果、「帰る」以外に「―ゐる」の例がない。「帰りゐる」は枕草子１例、大鏡１例、宇治拾遺物語２例、十訓抄１例があり、すべて「帰って、そこにとどまっている」の意味である。

(4) グループⅡは源氏物語だけではなく、「日本語歴史コーパス」（調査範囲：平安、鎌倉、室町）で検索した結果、宇治拾遺物語に「見行く」１例、堤中納言物語に「泣き行く」１例がある以外、「―来」「―行く」の例が見当たらない。それぞれ「見ながら移動する」と「泣きながら移動する」の例である。

(5)「日本語歴史コーパス」（調査範囲：平安、鎌倉、室町）で検索した結果、「来たまふ」は蜻蛉日記１例、堤中納言物語１例、今昔物語集３例、宇治拾遺物語６例、十訓抄１例、虎明本狂言集１例がある。「行きたまふ」は今昔物語集３例、宇治拾遺物語４例がある。しかし、「ゐたまふ」の303例と比べるとかなり少ない。

(6) 源氏物語に「ののしりおはす」の通常語形の形が見られないが、宇治拾遺物語には以下のような例がある。騒ぎながら迎えに来る場面であるため、やはり複合動詞だと考えられる。また、紫式部日記に「ののしりゐる」が１例あるが、「声をあげて祈る」の場面であり、「じっとしている」の意味である。

さて過ぎ行く程に、その祭りの日になりて、宮司より始め、万の人々こぞり集まりて、迎へにののしりきて、〈宇治拾遺物語、巻第十・六〉

(7) 源氏物語に「語らひおはす」の通常語形の形が見られないが、今昔物語集には以下のような例がある。「語らひ行く」は今昔物語集に４例がある。「語らひゐる」も１例あるが、移動しない場面である。「語らひ来」は見当たらなかった。

安高、「……」ト云ヘバ、女咲タル音ニテ、「……」ト答フル、極ク愛敬付タリ。此ク互ニ語ヒ行ク程ニ、近衛ノ御門ノ内ニ歩ビ入ヌ。〈今昔物語集、巻第二十七・第三十八〉

(8) 源氏物語に「並びおはす」の通常語形の形が見られないが、宇治拾遺物語には以下のような例がある。「並びゐる」は宇治拾遺物語に２例、落窪物語に１例、十訓抄に１例、今昔物語に３例がある。「並び来」「並び行く」は見当たらなかった。また、源氏物語には「並んで座る」の意味の「並み居る」が２例あり、「並びゐる」とは意味が近い。

上達部は南殿に並びゐ、殿上人は弓場殿に立ちて見るに、上達部の御前は美福門より覗く。〈宇治拾遺物語、巻第二・二〉

テキスト、索引

国立国語研究所（2016）『日本語歴史コーパス』バージョン2016.3　https://chunagon.ninjal.ac.jp/

阿部秋生ほか校注・訳(1994)『新編日本古典文学全集　源氏物語』小学館
池田龜鑑編著(1984)『源氏物語大成　校異篇』中央公論社
上田英代ほか共編(1994)『源氏物語語彙用例総索引』勉誠社
小林保治、増古和子校注・訳(1996)『新編日本古典文学全集　宇治拾遺物語』小学館
馬淵和夫、国東文麿、稲垣泰一校注・訳(1999)『新編日本古典文学全集　今昔物語』小学館

参考文献

金水敏(1982)「人を主語とする存在表現―天草版平家物語を中心に―」『國語と國文學』59-12
金水敏(2006)『日本語存在表現の歴史』ひつじ書房
中村幸弘(1995)『補助用言に関する研究』右文書院
日浅知子(1957)「源氏物語の敬語動詞「おはす・おはします」小考―行く・来るの意味を中心として―」『實踐文學』2

付記

本稿は平成28年度國學院大學国語研究会前期大会で発表した内容の一部を、加筆・修正したものです。発表に際して、貴重なご指摘・ご教示を賜わった先生方・参加者の方々にお礼申し上げます。